

意味, 表わし, 表現

La Signification, la Représentation, et l'Expression

矢 島 忠 夫*

Tadao Yajima

(1986.12.18 受理)

論文要旨

デカルト哲学を、「表現の理論」として捉えかえすための試論である。まず「感覚」の考察のうちに、「記号」の一般的定義が与えられる。第二に、「観念」ないし「知覚」が、「表わし」として、「思考」の中に位置づけられる。第三に、「記号」の「自然性」の「相対性」が問題とされる。次いで、「記号と意味の相関」の「複義性」と、「表わしと現われの相関」の「一義性」とが対比され、「記号」が「表わし」を「基づける」関係にあることが説かれる。そして、最後に、「記号」による一切の「攪乱効果」から独立の「表わしと現われの一義的相関」が、「自己からする表わし」たる「表現」と「表現の意味」との相関として捉えかえされる。

一 感覚と記号

le sentiment et le signe

デカルトの「感覚の理論」は、同時に、「記号の理論」でもある。

『宇宙論』第一章は、「感覚」(sentiment)を「観念」(idée)と捉え、対象のなかにおいて「観念を生じさせているもの」と「観念」との差異を語っている(AT, XI, p. 3⁽¹⁾)。一般に信じられているところによれば、「観念を生じさせるもの」は「観念」に「類似している」。「観念がその観念であるところのもの」が、即「観念を生じさせるもの」だと信じられるからである。時として、いずれもが「観念の対象」という一つの言葉で呼ばれることがある。「観念がその観念であるところのもの」を「映す鏡像」、「模写する似像」と解されるかぎり、観念とそれとの「類似性」は自明である。そして、「観念がその観念であるところのもの」が、即「観念を生じさせるもの」であるかぎり、観念とこれとの「類似性」も亦、疑われえない。

だが、これは、すくなくとも「言語」に関しては真でない。「言葉」(parole)は、言葉によって「意味されていること」(le signifié)の「観念」を、我々の「精神」のうちに、「生み出す」(produire)。そのようにして我々は、言葉の「意味」(signification)を理解する。だが、言葉は、言葉がその「記号」(signe)である「意味」と、何ら「類似している」(ressembler)わけではない。「語」(mot)は、その「記号としての機能」(signification)を、ひたすら「人々の約束」(institution des hommes) (AT, XI, p. 4) から得ている。或る「話し」(discours)を聞いて、その「意味」(sens)を十分に理解したあとで、その話しが「何語で」(en quelle langue)述べられたのかを言えないということが起りうるのも、話しが、ないしは単語の音や音節が我々の精神のうちに生じさせる観念が、「話し」の観念、ないしは「単語の観念」などではなく、「話し」の意味の観念、ないしは「単語の意味の観念」だからである。

時として、単語の音や音節が、「それ自身についての観念」を生じさせることがあれば、「単語の観念」と、「単語の観念を生じさせる単語それ自身」との「類似」について語ることもありうるであろう。だが、そこではもはや、すくなくとも「記号」とその「意味」について語ることはできないであろう。「観念」も亦、単なる「複写」以上ではありえないであろう。「記号」であったはずのものは、もはや何も「意味する」(signifier)ことをせず、「観念」であったはずのものは、もはや何も「表わす」(représenter)⁽³⁾ことをしない

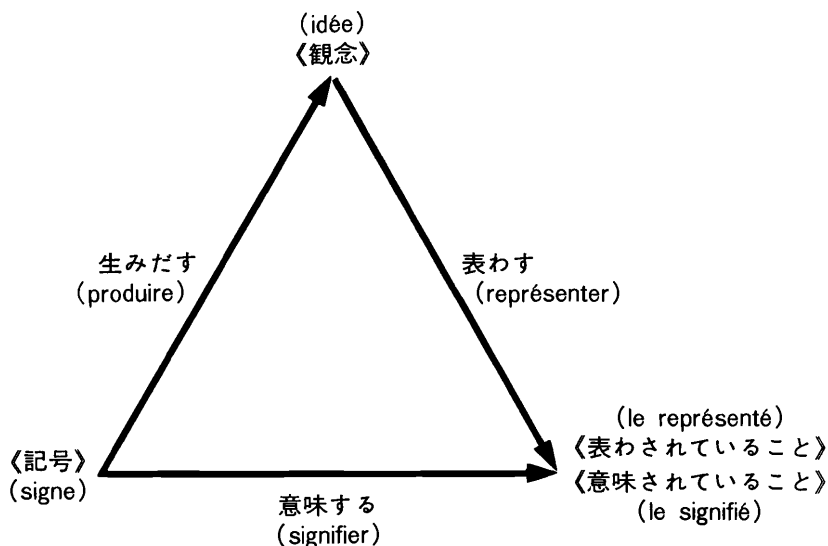
* 弘前大学教育学部社会科学科教室
Department of Social Studies, Faculty of Education, Hirosaki University.

であろう。

「観念」の核心は、「表わす」ことにある。「記号」の核心は、「意味する」ことにある。即ち、何事かを「表わす」観念を、我々の精神のうちに、「生じさせる」ことにある。観念が何事かを「表わしている」のでなければ、観念を「生じさせる」ものが、何事かを「意味している記号」として機能することもありえない。「記号」が「観念」を「生みだす」。観念は、その本性からして、何事かを「表わす」。まさにそのことによって、我々は、観念によって「表わされていること」(le représenté)を、「理解する」、ないしは「思考する」。記号は、この「観念によって表わされていること」を「意味している」。即ち、それが「記号の意味」である。「記号が意味していることを表わす観念」が我々の精神のうちに生じることによって、「記号の意味の理解」が可能となる。

かくして、「記号の一般的定義」を与えうる。すなわち、「XはYの記号である」、ないしは「XはYを意味している」、と言っているのは、「Xが、精神に現前する(se présenter)ことによって、Yを表わす(représenter)観念を、精神のうちに生みだす」、ときである。

この定義に従えば、「感覚を生みだすもの」は、一つの「記号」として捉えかえされる。感覚との如何なる類似性も持たない或るものが、「感覚が表わしていること」を「意味している記号」と解されることにも、もはや不思議はない。「言語」がその意味を「人々の約束」から得ている「社会的記号」であるとするれば、「感覚の記号」はその意味を、いわば「自然の約束」(institution de la Nature)から汲みだす「自然のしるし」である。



二 知覚と表わし

la perception et la représentation

「観念の核心は *représenter* にある」。そう語られた。

「観念」とは何であるか。『省察』によれば、「思考の形相」(*cogitationis forma*) (AT, VII, p. 160)⁽⁴⁾、ないしは「即思考」(*rei idea, sive cogitatio*) (AT, VII, p. 35) である。あるいは、知性のなかに「対象としてある」というかぎりでの「思考されたことそのもの」(*ipsa res cogitata, quatenus est objective in intellectu*) (AT, VII, p. 102) である。それは、「ものの像」(*rei imago*) (AT, VII, p. 37) であるにせよ、「物体的空想」(*phantasia corporea*) (AT, VII, p. 160) に、即ち「脳の或る部分」に描かれた「像」ではない。

たしかに、『情念論』によれば、視覚対象を精神に対して「表わしている」のは、直接には「眼のなかに起こる運動ではない」にせよ、「脳のなかに起こる運動」(AT, XI, p. 338)⁽⁵⁾ である。さらに、『人間論』によれ

ば、「観念」は、「脳の内表面に刻印されている形姿」⁽⁶⁾ではないにせよ、「精気のなかに描かれている形姿」、ないしは「精気が受けとる刻印」(AT, XI, p. 176-7)である。

しかしながら、観念が「物的なもの」として語られているのは、「そのなかに精神がなくても」(AT, XI, p. 185) 本当の人間の運動や機能と可能なかぎり完全に類似している運動や機能を「自然に結果する機械」(AT, XI, p. 202) が問題になっている、そのかぎりにおいてである。対象を、「想像したり、感じたりする」のは、依然として「精神」である。精神が機械のなかに入ってくることによって、「物的観念」を直接眺める、に至るのである。さらには、「腺のうち」に起こる運動の多様に応じて「精神のうち」に多様な刻印を受取るのは、即ち多様な「知覚を持つ」のは、「精神」である(AT, XI, p. 355)⁽⁷⁾。「知覚」は「思考」である。「思考」は「精神」にのみ属する(AT, XI, p. 342)。

「物的観念」ではなく、「思考の形相」としての「知覚」(perception) が《représenter》している。あるいは、「思考」である「表わし」(représentation) を「基づけている」(fundieren) 記号であるかぎり、⁽⁸⁾「物的観念」が《représenter》している、と言われる。

『省察』によれば、「思考」(cogitatio) は、(1)単なる「ものの像」(rei imago) ないし「ものの似姿」(rei similitudo) と、(2)それ以上の「形相」を持つ思考、たとえば「意志」(voluntas)、「感情」(affectus)、「判断」(judicium) とに区分される。本来の意味で「観念」と呼ばれるのは、前者のみである(AT, VII, p. 37)。それは、単に「もののかたち」(rei forma) を「表わしている」ところの「思考のかたち」(cogitationis forma) である。「空想に描かれた像」(imago in phantasiâ depicta) が「観念」と呼ばれるにせよ、それは、「物的空想」に、即ち「脳の或る部分」に描かれているかぎりにおいてではなく、脳のその部分へと振り向けられた「精神そのもの」を《informare》(AT, VII, p. 161) しているかぎりにおいてである。精神を限定し、いわばそれに一定の「かたち」を与えるかぎりでの、あるいは「精神のかたち」ないし「思考のかたち」であるかぎりでの「ものの像」、それが「観念」である。

『哲学原理』によれば、「観念」は「思考の様態」(modus cogitandi) (AT, VIII-1, p. 11)⁽⁸⁾である。「思考」は、(1)「知覚」(perceptio) 即ち「知性の活動」(operatio intellectus) と、(2)「意欲」(volutio) 即ち「意志の活動」(operatio voluntatis) とに区分される。「感覚する」(sentire)、「想像する」(imaginare)、「純粋に理解する」(purè intelligere) は、「知覚の様態」である。「欲求する」(cupere)、「嫌悪する」(aversari)、「肯定する」(affirmare)、「否定する」(negare)、「疑う」(dubitare) は、「意欲の様態」である。一方、「観念」は、即「ものの像」(idea sive imago rei) (AT, VIII-1, p. 11) である。観念は、それが「その観念」であると言われるものを、「対象として、ないしは像においてのように」(objectivè sive in imagine) あるいは「対象として、ないしは表わされたものとして」(objectivè sive repraesentativè) (ibid.)、自己のうちに含んでいる。観念が(1)「知覚」に区分されることは、言うまでもない。

『情念論』では、「精神の能動」と「精神の受動」という視点から、「精神の諸機能」の区分が、一層詳細に与えられる。「精神」(ame) の属性は「思考」(pensée) である。思考は、(1)「意志」(volonté) 即ち「精神の能動」(action de l'ame) と、(2)「知覚」(perception) ないし「認識」(connaissance) 即ち「精神の受動」(passion de l'ame) とに区分される。(1)「意志」は、(a)「精神に終結する意志」⁽⁹⁾と、(b)「身体に終結する意志」⁽¹⁰⁾とに区分される(AT, XI, p. 343)。(2)「知覚」は、(a)「精神を原因とする知覚」と、(b)「身体を原因とする知覚」とに区分される。(a)は、(i)「意志の知覚」(AT, XI, p. 343) と、(ii)「意志に依存する想像ならびにその他の思考の知覚」(AT, XI, p. 343) から成る。(b)は、(i)「神経に依存しない知覚」(ibid.)⁽¹¹⁾と、(ii)「神経に依存する知覚」(AT, XI, p. 345) とから成る。この(ii)はさらに、(i)「外的対象に関係づけられる知覚」(AT, XI, p. 346) と、(ii)「身体の状態に関係づけられる知覚」(ibid.) と、(iii)「精神そのものに関係づけられる知覚」⁽¹²⁾(AT, XI, p. 347) とに区分される。

一切の「知覚」が、広義の「精神の受動」である。それが、「もののかたち」を《représenter》している「思考のかたち」であるからである。精神は、「思考のかたち」(知覚) を「もののかたち」(知覚が表わしている) から、「受取っている」(recevoir) (AT, XI, p. 342) のである。

三 自然の約束と人間の約束

l'institution de la nature et les institutions des hommes

外的対象の運動が、身体の運動を生起させる。神経を介して精気に刻印される多様な印象に「対応して」、多様な変化が精神のうちに生起する。即ち、「知覚」が生ずる。知覚によって「表わされている出来事」が、「外的対象において生起している」と考えられるなら、それは「感覚」、たとえば「鐘の音の感覚」である。身体を刺激する外的対象の能動、精神を刺激する身体の能動、だが直接的には「精気の印象」が、「鐘の音」を、ないしは「鐘が鳴っている」ことを、精神に知覚させる「記号」である。

同様に、知覚によって「表わされている出来事」が、「身体自身において生起している」と考えられるならば、それは「身体感覚」、たとえば「快さの感覚」(*sentiment du chatouillement*)である。「精気の印象」は、「身体のごあいのよさ」(*bonne disposition de notre corps*)を「証言する」(*témoigner*)ために、「自然によって設けられた」(*instituée de la Nature*) (AT, XI, p. 399)「記号」である。

知覚によって「表わされている出来事」が、「精神自身において生起している」と考えられるなら、それは「精神感覚」即ち「情念」、たとえば「喜びの情念」である。「精気の印象」は、「身体のごあいのよさ」を、精神が身体と合一しているかぎりにおいて、「精神自身に属する善」(*le bien qui appartient à l'âme*)ないし「精神のごあいのよさ」(*bonne disposition de l'âme*)として「意味する」(AT, XI, p. 400)ために、自然によって設けられた「記号」である。

「精気の印象」(*impression d'esprit*)そのものが、「感覚」と呼ばれることがある。たとえば、「痛みの感覚」そのものが、「身体のごあいの悪さ」を「意味する」ために、自然によって設けられた「記号」である。そのとき、「精神の印象ないし思考」(*mentis affectio sive cogitatio*)である「感覚」は、「感覚の知覚」(*sensum perceptio*) (AT, VIII-1, p. 316)と呼ぶことができる。

そればかりか、「感覚の知覚」そのものが、「意味している」(*significare*)、と言われることがある (AT, VII, p. 83)。だが、そこで、「感覚の知覚」と呼ばれているものも、その実体は「脳における運動」以外のものではない。それが「精神」に対して、あたかも足にあるかのごとく苦痛を「感覚する」ための「合図」(*signum*)を与えるのである。そして、そのことが、「精神と身体とから複合されている」かぎりでの「人間の自然」(*natura hominis*) (AT, VII, p. 88) にかなっているのである。

感覚における記号は、感覚している「当の精神にとっての記号」として、「内的記号」(*signe interieur*)である。或る精神が感覚していることがらを知覚させる「他の精神にとっての記号」は「外的記号」(*signe exterieur*)である。「言語」は「思想」(*pensée*)一般のための外的記号である。言語は、その「意味機能」(*signification*)を「人々の約束」から汲みだしている。だが、すべての「外的記号」がそうであるわけではない。

我々は、ひとの顔色を見て、たとえば「熱そうだ」、ないしは「嬉しそうだ」と思う。あるいは、「寒そうだ」、ないしは「悲しそうだ」と思う。顔色は、「感覚」ないし「情念」の「自然なしるし」である。だが、同じ顔色が、「身体感覚」と「情念」のいずれをも「意味する」ことができる。時には、同じ顔色が異なる「情念」を、たとえば「喜び」と「悲しみ」とを「意味する」ことがありうる (AT, XI, p. 414)。そればかりか、顔や眼の働きは、「自然的」というより「意志的」(*volontaire*)でさえある。それは、情念を「表明する」(*declarer*)だけでなく、「隠す」(*dissimuler*)ことすらできる (AT, XI, p. 413)。かくして、この「自然のしるし」の「自然性」も、絶対であることはできない。

四 意味と表わし

la signification et la représentation

一般に、或る「物体の能動」(*action*)が、精神に対して、「何事を意味する」記号として機能しうるか、それゆえ、精神のうちに、「何事を表わす」知覚を生起させうるか。この点に関して「絶対的一義性」を語ることには、できない。物体の或る運動が、精神に対して、「何事かを意味する」記号として機能すること自体が、いわば「それを合図に」精神が「何事かを思考する」ことなしには、ありえないのである。

ところで、たとえば、感覚の「内的記号」において、精気の運動が或る一定のかたちをとると、それに対応して或る一定のかたちの思考が、「必然的に生まれる」ように「自然によって設定されている」と言えるのであれば、「絶対的一義性」について語ることも、その根拠を持つかも知れない。しかし、そのとき、「精気の印象」と「精神の印象」を区別すること、あるいは、精神が「それを合図に知覚する」などと言うことが、無意味にならないであろうか。「記号」として捉えかえされるべき「物体的印象」を即「知覚」と言いかえることを禁ずるものは、何も無いことになろう。それゆえ、「意味する」ことと「表わす」ことの差異を語ることも、もはや意味を持たない。「表わすもの」(知覚)と「意味するもの」(知覚を生じさせるもの)とは、「類似している」どころでなく、「一つの同じもの」であることになろう。知覚が「表わしていること」を「意味している」はずの「記号なるもの」を、「知覚」とは異なるものとして想定することが、まったく根拠を持たないのである。

「記号」と「知覚」とは、「区別しうる」のでなければならない。記号と知覚との関係は、「絶対的一義的生産」の関係ではなく、「基づけ」(Fundierung)の関係として捉えかえすことができる。精神は、物体的運動のかたちに「基づいて」、いわば「みずからにかたちを与えている」(s'informer)のである。物体的運動相互の原因と結果の連関は、記号と知覚との間のすくなくとも何処かで、即ち「何処でもない何処か」で、断たれていなければならない。

精神は実体である。思考は精神の属性である。そして、「知覚」は「思考のかたち」である。かくして、そのかぎりで「実在する」。ないしは、そのかぎりで「ものである」(esse res)。知覚は表わしている。知覚において「表わされていること」(le représenté)もまた、そのかぎりで「実在する」。即ち、知覚において表わされているそのかぎりで、「ものである」。「表わされていることがら」のこの「実在性」(realitas)が、観念の「対象の実在性」(realitas objectiva) (AT, VII, p. 40) ないし「対象の完全性」(perfectio objectiva) (AT, VIII-1, p. 11) と呼ばれているのである。

知覚において「表わされているもの」(le représenté)は、現象学者が、「Vermeintes als solches», „intentionaler Gegenstand”, „Noema” 等々と呼んでいるものと異ならない。「ノエマ」は、単なる「空虚なX」にすぎないのではなく、「その様態とともにある対象」(Gegenstand im Wie)である。⁰⁶「対象」は、「これこれであるもの」、「何々しているもの」である。「これこれのものが何々している」その「こと」、言うならばその「出来事」が、知覚において「表わされている」のである。

「知覚」は、「表わしているもの」(ce qui représente quelque chose)と言うより、むしろ「表わし」(représentation de quelque chose) そのものである。「精神」は、この「表わし」において、「自己に対して何事かを表わしているもの」(ce qui se représente quelque chose)である。「記号」はこの何事かを、精神に対して「意味している」。さらに、この何事かを精神に対して「現われさせている」かぎりで、あるいはむしろ、この何事かの「現われさせ」(représentation)を「基づけている」そのかぎりで、《représenter》している、と言いうる。かくして、この何事かが、精神に対して「現われている」(être représenté)。

「何事かの表わし」(représentation de quelque chose)と「表わされている何事か」(quelque chose qui est représenté)とを分かちつものは、現象学者が「ノエシス」と「ノエマ」の相関のうちに認める差異のほかには、何もないであろう。「精神が何事かを知覚している」、「精神のうちに何事かの表わしがある」、「精神に対して知覚が何事かを表わしている」、「精神のうちに何事かが表わされてある」ないし「現われている」。これらはすべて、一つの同じ事態の表現である。

「表わし」と「表わされていること」との間には、「記号」(しるし)と「意味」(しるされたこと)との間にありえた「複義性」(équivoque)の関係はありえない。「知性のうちに何事かの観念がある」ことが真であれば、「観念を介してその何事かが知性のうちにある」(esse objective in intellectu per ideam) (AT, VII, p. 41) こともまた、「必然的に真」である。観念の生起の「基づけ」が如何なる「記号」に依拠しようと、観念がひとたび生起してしまえば、この「一義性」を乱すものはありえない。思考の外なる「思考の原因」への問いを、ことごとく「遮断する」(ausschalten) ことよってのみ、「思考」(cogitatio)と「思考されていること」(res cogitata), ないしは、「表わし」(repraesentatio)と「現われ」(res repraesentata)との、「相関の一義性」(Eindeutigkeit der Korrelation)が、その真の姿で捉えられるのである。

五 自己からする表わしと表現

la représentation de soi et l'expression

「われわれのうちにある観念の对象的実在性」(realitas objectiva idearum nostrarum)は、まさにその同じ実在性を、「単に対象的にのみでなく、そのままのかたちで、あるいは、より卓越したかたちで」(non tantum objective, sed formaliter vel eminenter) 含んでいる「原因」を要求する(AT, VII, p.165)。

かくして、或るものXが、精神に現前することによって、或るものYを表わしている観念を、精神のうちに「生じさせる」ことができるのは、(1)XがYの「自然によって設定された記号」であるか、(2)XがYの「人間によって設定された記号」であるか、(3)XがYの観念の「真の原因」であるか、そのいずれかであるからである。ところで、(1)「感覚の記号」は感覚の「真の原因」ではなかった。感覚を「直接生みだす原因」であるかに思われている「記号」そのもののうちに、「感覚されていること」(res sensa)が「そのまま」(formaliter) 含まれているとする判断がつねに誤るのは、そのゆえである。さらに、(2)「言葉」が意味している「思想」が、言葉のうちに「そのまま」含まれているのでないことも、既に繰り返し語られた。だが、(3)「神」は「神の観念」を我々の精神のうちに生みだす「真の原因」である。とすれば、「神」は、「神の観念が表わしている神の本質」を「意味している記号」なのであろうか。そのとき、「記号」とその「意味」との「複義性」は、依然として拭いさりえないのだろうか。

「観念」は、「ものの本質」(rei essentia)を「表わしている」(AT, VII, p.371)。「神の観念」において「表わされている」のは、「神は、或る無限な、独立的な、この上なき知性を持ち、この上なき力能を持ち、そしてこの私自身をも、他の何かが存在しているなら、存在しているかぎりのすべてをも、創造したところの実体である」(AT, VII, p.45) ことである。神はこれらの諸属性のことごとくを、我々の精神が「思いえがいている」(sibi repraesentare)「そのままに」、あるいは、我々の精神の一切の思いを、「限りなく凌駕した姿で」含んでいるはずである。我々のうちなる「神の観念」そのものが、「神の似像」(imago Dei)、「神の似姿」(similitudo Dei) (AT, VII, p.51) と呼ばれるのは、そのゆえである。

神は、我々の「存在の原因」、我々の「制作者」である。それは、我々のうちなる一切の観念、とりわけ「神の観念」の存在の原因である。かくして、我々のうちなる「神の観念」そのものが、神の作品たる我々のうちに刻印された「制作者のしるし」(nota artificis) (ibid.) と言われることになる。

「神の観念における記号」を考えるためには、二つの「記号関係」を区別すべきである。まず第一に、(1)我々の精神に神が現前する。(2)神の本質を表わす観念が我々の精神のうちに生みだされる。(3)我々の精神が神の本質を理解する。第二に、(1)神の本質の観念が我々の精神に現前する。(2)我々の制作者(ないしは神の本質の観念の制作者)の本質を表わす観念が我々の精神のうちに生みだされる。(3)我々の制作者の本質を我々の精神が理解する。第一の「記号関係」では、「神」そのものが、神の本質を意味する「記号」(signum) である、と言いうる。第二の「記号関係」では、「神の本質の観念」が、我々の制作者の本質を意味する記号、即ち《nota artificis》である。

第二の「意味機能」(significatio)は、「結果が原因の記号である」こと、ないしは「作品が制作者の本質を意味している」ことに、依拠している。或る「作品」が我々に現前することによって、我々は、「これほどの作品を創りうるほどの人であれば、その力量もまた並々ならぬものであろう」などと考えることがある。第一の「意味機能」の方は、「観念の表わしていることを、観念の原因が意味する」ことに、依拠している。これが「記号」一般の「意味機能」と異なるのは、「神の観念」が、神以外のものによっては「生みだされえない」ことのみである。「神そのもの」が我々の精神に現前するとき、我々の精神は、「神の本質」以外のものを考えることができない。第一の「意味」(significatio)の「一義性」が、第二の「意味」の「一義性」を基礎づける。「唯一無比」の記号によって生じさせられる「唯一無比」の観念は、それ自身がまた「唯一無比」の観念を生みだす「唯一無比」の記号として機能する。即ち、「神の観念」は、「唯一無比なる制作者においてはその本質(essentia)とそれの実存(existentia)とは一致している」ことを「意味している」。

「神の観念」にかかわる「記号と意味の一義的相関」は、「神の観念」が「生得観念」(idea innata) (AT, VII, p.51) の一つであることから、捉えなおすことができる。

或る観念が、「我々に生得的である」(nobis esse innate)と言われるのは、その観念が「我々に常に顕在している」(nobis semper obversari)からではなく、我々が我々自身のうちにその観念を「喚起する能力」(fucultas eluciendi)を持っているからである(AT, VII, p. 189)。それは、私自身以外のところから「私のもとに到来する」ことはない(AT, VII, p. 133)観念である。私が神によって創造されたそのかぎりではせよ、それゆえ我々の懐く一切の観念の原因は真実には神そのものの以外にありえないにもかかわらず、「生得観念」に関しては、一切は、「我意志す」(volo)が直接「我思う」(cogito)を「生みだす」かのごとく、それゆえ、我々自身が「観念の原因である」かのごとくに生起する。「神そのもの」が、「神の観念」を生みだす「記号」として、我々の精神に現前するはずの、或る「絶対的な瞬間」の問題は、そのかぎりでは舞台から姿を隠していることができる。

我々自身のうちに「観念を喚起する能力」がある。そこから一切が始まる。精神を「刺激」(elicere)し、精神のうちに観念を「喚起する」(elicere)のは、「精神そのもの」である。精神の「自己触発」ないし「自己現前」によって、精神が、「自己自身から」ひきだすのである。

たとえば、人間が、「思考」とか「実存」などという「言葉」を、「生まれながらに」知っているわけはない。だが、彼は「思考している」。また「実存している」。そして、そのことを理解している。即ち、「反省された認識」(cognitio reflexa)に常に先行する「内的認識」(cognitio interna)によって、「それらの言葉が意味していること」(verborum significationes)を「生まれながらに」知っている(AT, VII, p. 422)。そう言うべきなのである。

かくして、「生得観念」は、「精神そのものからひきだされた観念」、精神の「自己からする表わし」として、《représentation de soi》と呼ぶことができる。

「言葉」は、精神が自己自身に生得的観念の或るものを「注視する」(respicere)ために、いわば「自己を自己自身へと振り向ける」(se ad seipsam convertere)(AT, VII, p. 73)、その「きっかけ」(signum)でありうる。一般には、記号の「物体的諸特性」の差異が、「記号の意味として理解されるもの」に、多少とも「攪乱効果」をおよぼすことは、避けえない。「物体」の本性を考えるために「想像」に訴えるとき、「精神と物体の結合」の本性を考えるために「感覚」に訴えるときにも、同じ「攪乱効果」が問題である。攪乱効果からまったく自由な思考があれば、それこそを、「純然たる」「自己からする表わし」として「表現」(expression)と呼ぶことができる。

《représentation de soi》にあっては、「記号と表わしの基づけ関係」も、「記号と表わされている出来事との意味関係」(signification)も、問題ではない。精神にとって現前しているのは、「表わしと現われの一義的相関」(corrélacion univoque de la représentation et du représenté)の関係のみである。記号の攪乱効果は、原理上、この「一義性」(univocité)に一指も触れえないはずのものである。

記号の攪乱効果を「遮断」し、それを「零」にまで「還元する」ことが許されるなら、すなわち、記号の「身体」が透視され、その身体を貫いて記号の「精神」が一義的に知覚されることが可能であるなら、その「記号」もまた「表現」(expression)と言う名で呼ぶことができる。そのとき、精神に対して「合図を送る」(signifier)はずの記号は、精神がいわば「自己自身に合図を送る」(se signifier)ことによって自己の意志のみから始動するときと、まったく「同一の効果」をもたらすであろう。「言語」は、単に感覚されることも想起されることも必要なく想像されさえすればよいだけでなく、その「意味さえ理解されていさえすればよい」ものと解されうるかぎりでは、「表現している」(exprimer)と言われうるのである。⁷⁷

注

- (1) R. DESCARTES: LE MONDE ou Traité De La Lumiere; Oeuvres de Descartes, publiées par Charles Adam et Paul Tannery (以下A Tと略記する) XI, Paris, J. Vrin, 1986. 翻訳は、白水社刊『デカルト著作集』第4巻所収、野沢協・中野重伸訳『宇宙論』を参照した。
- (2) ここでの「記号論」からすれば、このことはありえないであろう。「単語」ないし「音」の観念を生じさせるものは、単語ないし音そのものではない。すくなくとも、すでに単語ないし音と理解されているものではない。
- (3) 《représenter》は、「現わす」、ないしは「現われさせる」でもある。かくすることによって、拙稿『「現

- われ」と「表わし」の普遍的相関——「表現」の一般理論のために——』（弘前大学教育学部紀要、第55号、1986.）における „Darstellung” と „Erscheinung” の相関に比して一層広い意味で、「表わし」と現われの相関（*corrélation de la représentation et du représenté*）を表現することができる。
- (4) R. DESCARTES: *MEDITATIONES DE PRIMA PHILOSOPHIA*; AT, VII, J. Vrin, 1983. 翻訳は、白水社刊『デカルト著作集』第2巻、所雄章・他訳『省察および反論と答弁』を参照した。
- (5) R. DESCARTES: *LES PASSIONS DE L'ÂME*; AT, XI, J. Vrin, 1986. 翻訳は、白水社刊『デカルト著作集』第3巻所収、花田圭介訳『情念論』を参照した。
- (6) R. DESCARTES: *L'HOMME*; AT, XI, J. Vrin, 1986. 翻訳は、白水社刊『デカルト著作集』第4巻所収、伊東俊太郎・塩川徹也訳『人間論』を参照した。
- (7) 《elle reçoit autant de diverses impressions en elle, c'est à dire, qu'elle a autant de diverses perceptions, qu'il arrive de diverses mouvemens en cette glande.》ここで《elle》は、一貫して《l'âme》を指示している、と解する。
- (8) R. DESCARTES: *PRINCIPIA PHILOSOPHIAE*; AT, VIII-1, J. Vrin, 1982. 翻訳は、白水社刊『デカルト著作集』第3巻所収、三輪正・本多英太郎訳『哲学原理』を参照した。
- (9) たとえば、「神を愛そう」と意志することのみから「神を愛する」ことが生起する。一般に、「非物質的なもの」を「考えよう」と意志することのみから「考える」ことが生起する。
- (10) たとえば、「散歩しよう」と意志することのみから、「脚が動く」こと、「散歩する」ことが生起する。
- (11) 「意志している」ことのみから、「意志していることの知覚」が生起する。「知覚」は「精神の受動」であるにしても、「意志」は「精神の能動」であった。「意志のみを原因とする」がゆえに、広義の「精神の能動」である。
- (12) 「まったく存在しないもの」を「想像しよう」と意志すること、ないしは「単に理解できるだけで想像さえしえないもの」を「考えよう」と意志することから生起する。「意志に依存する」がゆえに、一種の「精神の能動」である。
- (13) 「意志に依存する想像」に比して「身体に依存する想像」である。「神経に依存しない知覚」ではあるが、「精気に依存する知覚」である。「夢の幻覚」(*illusion de notre songe*) や「夢想」(*rêverie*) のように、「神経に依存する知覚」の「影」(*ombre*) ないし「絵」(*peinture*) の如きものである。「身体の能動に依存する」がゆえに、広義の「精神の受動」である。
- (14) 広義の「感覚」(*sentiment*) である。外的対象によって生起する「身体の状態」(*affection de notre corps*) が、精神に対して、(i) 外的対象の状態を「表わしている」か、(ii) 身体の状態それ自身を「表わしている」か、それとも、(iii) 精神そのものの状態を「表わしている」かによって、区分される。
- (15) 我々が「情念」と呼ぶ、狭義の「精神の受動」である。「神経に依存する知覚」という規定にもかかわらず、「精気の運動のみに依存する知覚」(AT, XI, p. 348) や「精神を原因とする知覚」さえもが、「情念」と呼ばれることがある。それらは、いずれも、「精神の状態」を表わしている知覚である。即ち、その結果が、「精神そのもののうちに感じられる」知覚である。精神のうちに、「ただ精神自身によってのみ」生起させられる「内的情動」(AT, XI, p. 440) でさえも、精神が身体に「結合されている」(AT, XI, p. 397) そのかぎりでは、「精気の運動に依存している」のである。
- (16) E. HUSSERL: *IDEEN ZU EINER REINEN PHÄNOMENOLOGIE UND PHÄNOMENOLOGISCHEN PHILOSOPHIE*, Erstes Buch, Neuherausgegeben von Karl Schumann, 1. Halbband; Husserliana, Band III-1, S. 303, Den Haag, Martinus Nijhoff, 1976. „Gegenstand im Wie” は „Sinn” とも呼ばれ、「まごとのノエマ」(*volles Noema*) の抽象形式と考えられている。だが、今は詳細を問わない。前掲『相関』論文、20頁参照。
- (17) E. HUSSERL: *LOGISCHE UNTERSUCHUNGEN*, Zweiter Band, Erster Teil, Herausgegeben von Ursula Panzer; Husserliana, Band XIX-1, Erstes Kapitel, §8. Die Ausdrücke im einsamen Seelenleben, Den Haag, Martinus Nijhoff, 1984.